

「子どもの家」に見られるモンテッソーリのフェミニズム思想(2)

著者	中田 尚美
著者所属(日)	平安女学院大学短期大学部保育科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	8
ページ	53-61
発行年	2008-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001263/

「子どもの家」に見られるモンテッソーリのフェミニズム思想(2)

中田 尚美

はじめに

モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1925) の思想と方法は、成立から 100 年を経た今日でも世界各国で普及し、影響力を保っている。わが国では、明治末期に初めてモンテッソーリ教育が紹介され、幼児教育の現場に大きな影響を及ぼして現在に至っている。

前之園幸一郎¹によると、近年、モンテッソーリ教育については、新しい観点に立つ研究の機運が高まりつつある。その主な論点は、教育方法上の技術的問題ではなく、その思想的全体像を歴史的背景ならびにキリスト教的な文化の中に位置づけることに置かれているという。モンテッソーリ教育の形式にのみ目を奪われることなく、より本質的なモンテッソーリ教育の原理に目を向け、その教育思想を明らかにすることが今日求められているといえる。

筆者は先の研究²で、最初の「子どもの家」(Casa dei Bambini) が設立された 20 世紀初頭のイタリアの時代背景について概観するとともに、「子どもの家」開設前のモンテッソーリフェミニズム思想について分析し、その思想が「子どもの家」における教育実践にどのように生かされたかについて考察を試みた。しかし、カリキュラムについて具体的に分析することができなかった。

「子どもの家」のカリキュラムについての先行研究としては、わが国ではオムリ慶子が『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究』³において初期のモンテッソーリ・メソッドの教育内容とそこでの言語教育の位置付けを行っているが、フェミニズム思想との関連については言及していない。早田由美子はフェミニズム思想を彼女の教育思想の形成に影響を与えた一つの要因としてとりあげ⁴彼女のフェミニズム思想がどのように形成されたかを検討し、それが後の教育思想にどのように生かされたかについて詳細に論じている⁵。しかし、「子どもの家」のカリキュラムについて十分に論じているとはいえない。また、アメリカのフェミニズム教育学者マーティンは、「子どもの家」をヒントにしながら「スクールホーム」のビジョンを描きだしているが、内容については詳細に論じていない⁶。

小論の目的は、これらの先行研究をふまえながら、モンテッソーリのフェミニズム思想が 1907 年に設立された最初の「子どもの家」のカリキュラムにどのように生かされたかについて考察することである。まず、モンテッソーリ教育理想について述べ、次それを実現するためにどのようなカリキュラムが構成されたかについて考察を進める。すなわち、『モンテッソーリ・メソッド』初版に沿って「子どもの家」の教育内容について明らかにし、それらの内容が実際にどのように扱われていたかについて考察する。最後に、モンテッソーリが子どもたちが信頼関係の中で安心して育つことができるように「子どもの家」にケアの関係を成立させ、カリキュラムにマーティンのいう三つの C すなわちケア、関心、絆⁷を組み込んでいた意義について言及したい。

1 章

本章ではまずモンテッソーリ教育理想について述べ、それを実現するためにどのようなカリキュラムが構成されたかについて考察を進めたい。

「子どもの家」における実践を報告した『モンテッソーリ・メソッド』の中で彼女は、保護されるばかりの立場が女性の活動性や人間性を脆弱にしていることを指摘している⁸。モンテッソーリによれば、女性だけではなく「誰でも独立していなければ自由ではありえない」⁹。主人の奴隷に対する

依存、夫の妻に対する依存、子どもの母親や教師に対する依存を指摘して彼女は、「われわれは未来の世代を有能な人（powerful men）にしなければならない。それによってわれわれは独立した自由な人を考えている¹⁰⁾」と結論付けた。彼女は人といっているが、それは実際には男性と女性の両方を意味している。というのも、彼女は就任演説のときにすでに次のように述べているからである。「新しい女性は、蝶がさなぎから出てくるように、かつて女性を男性にとって生存の物質的幸福の源としてのみ望ましいものにしたそれらのあらゆる属性から解放されるでしょう。彼女を男性のように個人であり、自由な人間存在であり、社会的労働者にしましょう¹¹⁾」。

したがって、「子どもの家」における教育は、奴隸的教育を廃し、「すべての市民的進歩につながる作業と自由（work and liberty）に立脚し¹²⁾」、「独立のための教育（education for Independence）」すなわち子どもが独立の道を歩むことを援助することによって「力ある人間の形成」をめざしたのである¹³⁾。

それでは、この教育原則に基づいた「子どもの家」のカリキュラムは、どのようなものだったのだろうか。『モンテッソーリ・メソッド』では、モンテッソーリが実践した教育方法に関する説明が次のような順序で行われている。「実際生活の練習」「筋肉教育」「教育における自然」「手工」「感覚教育」「感覚教育と教具の説明」と続いた後、「知的教育」がおかれ、最後にいわゆる3R'sである「読み書きの教授方法」「幼児期における言語」「算数の教授」が考察されている。以下、『モンテッソーリ・メソッド』初版に沿って「子どもの家」の教育内容について概観する。

1.1 実際生活の練習

実際生活の練習は、清潔の検査から始まる。子どもの髪、手、爪、耳、顔、歯を点検し、また、服は破れていないか、ボタンは取れていないか、靴は汚れていないかなど、子ども同士観察しあい、自分自身を観察する習慣をつける。毎日入浴することはできないが、指や耳、顔など体の部分を洗うことを教える。そして教師は、年長の子どもに対し、年少の子どもたちが自分でできるように指導する。

次は環境の観察である。部屋はちゃんと整頓されているか、埃はたまっていないかを見る。部屋をきれいに掃除する。そして子どもたちに、自分の場所で静かに足をそろえて頭をまっすぐにして座らせ、落ち着くということを教える。物音を立てないように立たせ、どのように身をこなすべきかを学ばせる。そして、行く、戻る、挨拶をする、物を置く、お礼を言いながら物を受け取るなどの、優雅に身をこなすためのレッスンをする。その後、教師は子どもたちに前の日に家で何をしたかを尋ね、特に月曜日は時間をとって、子どもたちとの会話の時を持つ¹⁴⁾。

1.2 筋肉教育、自然、手作業

これら3つの教育領域は、現在のモンテッソーリ教育では、ほとんど重視されなくなっているが、初版では実際生活の練習の次の章にそれぞれ独立した章として設けられており、初期の「子どもの家」ではこれら3つの教育領域が重視されていたことがわかる。

(1) 筋肉教育

ここでの筋肉教育とは、つまり体操である。彼女によれば、特に3歳から6歳に必要な体操は散歩である¹⁵⁾。彼女はセガンが考案したトランポリンと呼ばれる椅子式ブランコや、振り子と呼ばれるボール遊びの遊具、線上歩行、螺旋階段、なわばしなどを子どもに適当な体操遊びとしてあげている。また、器具を使わない体操を自由な体操と呼び、歌を歌いながら行進することや、フレーベルの歌を伴った遊戯もよいとしている。また、自由遊びのために、子どもにボールや輪、豆の入った袋、凧を与えている。さらに、教育的体操として①戸外での庭作業や動植物の世話②指の調整練習、つまり実際生活の練習をあげている¹⁶⁾。

(2) 自然

「教育における自然」という章の中で、モンテッソーリは農作業や動植物の飼育栽培の教育的意義

について述べ、イギリスのラター（Latter）夫人の考える庭作業と畑仕事を紹介しながら、これらの作業が子どもを宗教的感情にまで導く段階を示している¹⁷。この点については、3章で改めて述べる。

(3) 手工

彼女は、ここでフレーベルの手工に言及し、織物や縫い物は子どもの生理的発達に適していないと述べている¹⁸。粘土はフレーベルの作業の中で一番合理的なものであるが、それで何かを模してつくるというのではなく、芸術家ランドーネ教授が言うように、若者をして事物や建築物など環境へ敬意を払う教育を目指し、古代からの芸術の一形式である壺の製作を行うのがよいとして手工の教育に導入している¹⁹。

1.3 感覚教育

モンテッソーリは、実験教育メソッドにとって感覚教育が一番重要なものだとして位置づけている²⁰。温度、重量、形態、大きさ、香り、色彩、音など、物の多様な性質の中から一つを選び、その性質に関する程度の相違を個々の感覚を用いて認識させることが試みられた。

感覚教育の主な内容は次の通りである。①温度感覚の練習（異なる温度の水を満たしたボウルに手を浸す）②重量感覚の練習（重さの異なる3種類の木の板を識別）③触—運動感覚の練習（フレーベルの積み木、立方体と直方体を目隠しをして識別）④嗅覚の練習（異なる花の匂いをかぐ）⑤味覚の練習（苦い、酢っぱい、甘い溶液を舌で触れる）⑥視覚の練習（大きさ……立方体の差し込み円柱。太さ……太さを段階づけた角柱。長さ……長短の物体。形……平面幾何学的な木製のはめ込み形、図形のカード。）⑦色彩感覚の練習（64色の色彩板を同系色で色の明度の順に並べる、64色の中から同色を探す）⑧聴覚の練習（13個の音感ベル、静粛の練習）²¹ また、彼女は「セガンの3段階」とよばれるレッスンをを行い、知覚と言語を結びつけようとしている²²。

1.4 知的教育

ここで記述されている内容は実に幅広く、五感を通しての物事の認識からセガンの3段階による名称練習などの言語分野、物の大きさ、形、図案の認識など幾何学的思考の準備をする数学的分野、色彩感覚の練習や自由画と自由な造形などの芸術分野にいたる²³。

1.5 読み書きの教授、算数の教授

3R'sの教授は感覚教育の発展形態としてきわめて系統的に行われ、すぐれた成果をあげた。

(1) 書き方教授の段階²⁴

①筆記具をもち、それを使用するのに必要な筋肉のメカニズムを発達させる練習 ②アルファベット文字の視覚—筋肉感覚的イメージを確立し、書き方に必要な運動の筋肉記憶を確立する練習 ③言葉の構成のための練習 ④本格的な書き方の練習

(2) 読み方²⁵

教具は、筆記体の単語や短文が書かれている細長い紙、またはカードと、その単語に相当する様々な玩具である。単語を読むゲーム、短文を読むゲームを行う。

(3) 算数の教授²⁶

①事物に即した数え方の練習②数字の教授③数字と量の連合のための練習④数の記憶のための練習⑤事物に即した10までの加減乗除の練習 ⑥十進法での練習および10以上の算数計算

おおむね子どもたちは4歳で書き方を始め、5歳で小学校1年の子どものように読み書きができるとモンテッソーリは誇らしげに語っている²⁷。算数の教授については、第⑤段階目での練習は「5歳の子どもにとって困難ではない」と述べている²⁸。

2章

本章では、まず、前章で見てきたモンテッソーリの初期の教育内容が、「子どもの家」で実際にど

のように扱われていたのか、またそれらの教育内容間の比重はどうだったのかについて述べよう。
初版に紹介された「子どもの家」における時間割（冬期）は、次のとおりである²⁹。

午前9時開始 午後4時終了	
9-10	入室。挨拶。清潔の検査。実際生活の練習（互いに助けあってエプロンを着脱。塵が払われ整頓されているかを調べる。）言語。会話の時間。前日の出来事について話す。宗教的訓練。
10-11	知的訓練。短い休憩時間のあとで実物教授。名称練習と感覚練習。
11-11:30	簡単な体操。日常の優雅な動き、身体の正しいポジション、散歩と行進、気をつけの姿勢をとる、事物を優雅に置く。
11:30-12	昼食。短いお祈り。
12-1	自由遊び。
1-2	可能な限り戸外で設定遊び。この間、年長の子どもたちは順番に実際生活の練習を行い、掃除をし、ちりを払い、物を整頓する。全般的な清潔の検査。会話。
2-3	手工。粘土。デザインなど。
3-4	可能な限り戸外で集団体操と歌。先見力を発達させるための練習。動植物をたずねその世話をする。

この時間割を見ると、登園後の挨拶、視診、そして一日の保育に入る前の準備（エプロンを着たり、環境の点検など）の後、朝の集いが始まる。そこでは子どもたちとの会話や先生のお話（道徳のお話）があり、お祈りで締めくくられる。10時から1時間、知的訓練の時間があり、ここで感覚教育が行われる。そして実際生活の練習での動きも含めた簡単な体操があり、その後は昼食となっている。午後からは自由遊びが1時間、その後、年少・年中児は外での設定遊びがあり、その間年長児は掃除や整頓を行う。2時から手工が1時間あり、その後降園までは戸外で体操や歌、庭作業を行っている。以上見てきたように、初期の「子どもの家」では、自由遊びや遊戯、庭作業、手工など、当時のフレーベル主義幼稚園的な要素が多く取り入れられていた。

なお、女性を昼間の育児労働から解放するために「子どもの家」では長時間保育が行われたが、モンテッソーリは、さらに、冬期は午前9時から午後5時、夏期は午前8時から午後6時の長時間保育を提案している³⁰。また、長時間保育のため少なくとも1時間の午睡が必要であるとして、ローマの「子どもの家」では幼児たちを自分のアパートに午睡に帰宅させたと述べている³¹。

この時間割では、モンテッソーリ教育独特の算数教育、言語教育はほとんど見当たらず、今日の「子どもの家」の時間割とは大きな隔たりがある。しかし、初期のモンテッソーリが理想としていた教育内容の一日の配分を見ることができる³²。「私はほかのあらゆる人と同様に、読み書きの教授をできる限り遅く始め、6歳までは避けなければならないという偏見をもっていた³³」と述べているように、彼女は「子どもの家」創立時には幼児に対する読み書きの導入には批判的であった。そのため、初期の「子どもの家」でのプログラムを実際生活の練習と感覚教育の練習に限っていたのだと考えられる。

紙面の関係上、感覚教育の練習については稿を改めて論じることとし、以下、実際生活の練習について言及しよう。

社会の最底辺に生きる幼児たちを対象にし、長時間保育を行ったことから、「子どもの家」では、本来は家庭教育の領域にある実際生活の練習が教育内容の中で大きな割合を占めていた。マーティンによると、家庭は子どもたちの教育における隠れたパートナーであり、私たちは幼いころに今の自分の存在や振舞い方の多くを家庭で学んだということを忘れがちである。子どもが家族と過ごす時間が

少なれば少ないほど、子どもたちの学習に深刻な欠落が生じることを知っていたモンテッソーリは、「子どもの家」に、家庭の雰囲気と子どもたちの家庭から失われてしまったと考えられるカリキュラムを移植することによって、この欠落を埋めようとした³⁴。自分ひとりで身体を洗い、服を着ること、はっきり話し注意深く聞くこと、他人に親切に、寛大に接すること、弟や妹の面倒を見ること、協力して作業すること、仕事を最後までやり遂げること、こういった学習すべてあるいはそれ以上のことが「子どもの家」のカリキュラムにとりいれられた。その結果、「子どもの家」は母親が社会的賃金労働者になったために起こる恐ろしい家庭と家族の解体を防ぐ「社会化された家庭³⁵」となり、家庭に期待されながらも、貧しい家庭では果たすことが困難な機能を担うことができたのである。

以上、初期の「子どもの家」でのプログラムにおいて、実際生活の練習と感覚教育の練習が大きな割合を占めていたことについて述べた。子どもたちが適切なケアを受けておらず、家庭で学ぶべきことを学んでいないのだと考えたモンテッソーリは、家庭の雰囲気と子どもたちの家庭から失われてしまったと考えられるカリキュラム、たとえば身体の清潔、礼儀正しくふるまう、客をもてなすなどという営みを「社会化された家庭」としての「子どもの家」にとりいれたのである。

3章

本章では、モンテッソーリが、信頼関係の中で子どもたちが安心して育つことができるように「子どもの家」にケアの関係を成立させたことについて述べる。次に、「子どもの家」が、子どもに安全と安心を与え、家族的な愛着の雰囲気を持ち、カリキュラムに三つのCすなわちケア、関心、絆を組み込んでいた意義について言及しよう。

大切なことは、子どもたちが「子どもの家」で、家庭で与えられなかった世話と愛情を受けることができたということである。スラム街の劣悪な環境の中で育った子どもたちは、共同住宅の壁や階段を傷つける「無知な小さな野蛮人³⁶」と化していた。そんな子どもたちが、かけがえのない存在として大切にされ、安全で、愛されていると感じ、教師に対する信頼関係の中でくつろぐことができるようになったのである。

『モンテッソーリ・メソッド』の中で彼女は、子どもたちがひっきりなしに作業に取り組んでいたこと、そしてそれは「もし子どもたちの、おずおずとしたところが全くないことや、彼らの輝く目、彼らの幸福で自由な外観、作品を見るよう誘うときの彼らの真心のこもった友情、彼らが訪問者たちを連れ回って事柄を説明するときのやり方など」をみることがなければ、子どもたちは抑圧されているのではないかと思われかねないほどであったという事実に触れている。そして次のように結論付けている。「これらのことがらが、われわれが「子どもの家」の主人たちの面前に感じるように感じさせる」³⁷。

「子どもの家」の教師と子どもたちの間にある愛情のこもった関係は、はっきりと目に見えるものであった。モンテッソーリは子どもたちが「教師のひざに腕を投げかける時の、また彼女をかがませて接吻する時の³⁸」情熱振りを書き留めている。「子どもの家」に浸透している愛情は、個人の認識と個人に対する愛のこもった世話を基礎としていた³⁹。そこでは、一人ひとりの子どもがその存在を受け入れられ、その子が生きていく自己を形成していくことができるよう細やかな配慮を受けることができたのである。

モンテッソーリは、やっと活動を始めたばかりの幼い子どもについて次のように述べている。「我々は個性のこうした最初の表出を謹み敬って尊重しなければならない。」教師は、「自然現象を観察する能力ばかりでなくそれに対する願望をも⁴⁰」仕事に持ち込むような科学者でなければならないと彼女は主張する。「教師は能動的な影響よりずっと受身的な影響とならなければならない。彼女の受動性は観察しようとする諸現象に対する切実な科学的好奇心と絶対的な尊重から構成されるであろう。教

師は、自分が観察者の立場にあることを理解し感じなければならない⁴¹⁾。モンテッソーリは、個々の子どもの個性を大事に育てるために、個性を尊重し理解することが重要だと考えていた。「子どもの家」の教師は、子どもの内的生命の観察者であり、個々の子どもに関心を寄せ心を砕くことによって、その自発的活動を援助する者だとされた。

また、子どもたちは一見ばらばらに活動しているようだが、それは家庭的な文脈においてであり、彼らは相互に関心を持ち、家庭的な愛情で結ばれていたことをマーティンは指摘している⁴²⁾。「子どもの家」では、教室で物の取り合いをめぐる喧嘩が起きたことが一度もなかったということに注目して、モンテッソーリは次のように述べている。「もし一人が特別にすばらしい何かを仕上げるならば、彼の成功は他の子どもたちにとって賞賛と喜びの源になる。どの子の心も他人の豊かさについて悩むことはなく、一人の子の勝利は全員の喜びである⁴³⁾」。

このように、「子どもの家」は家族的な愛着の雰囲気満ちていた。初期の愛着関係がさまざまな学習の基礎となっており、言語や認知の発達に影響を及ぼすことは周知の事実であるが、「子どもの家」における教師と子どもたち、そして子どもたち同士を結びつける愛情は、彼らの学習の前提条件であったといえる⁴⁴⁾。安心感と力強さを与えられた子どもたちは自分の能力を存分に発揮し、1.5ですでに述べたように読み書き算の練習ですぐれた成果をあげるなど、知的な好奇心を持った積極的に活動的な子どもへと変身していく。

最後に、自己へのケア、他者へのケアだけでなく、動植物へのケアも「子どもの家」のカリキュラムに組み込まれていたことについて述べておきたい。すでに述べたように、農業や動物の飼育が道徳教育の貴重な手段であるという考えに基づき、「子どもの家」では子どもに農作業を課し、動植物を飼育栽培させ、自然を観察させた。ここで注目すべきことは、男女を問わず自らをケアし、他者をケアする力を養成させる⁴⁵⁾とともに、子どもが動植物や自然環境へのケアへとケアの対象を広げていくようにカリキュラムが構成されていたことである。

子どもたちが動物や植物を世話するとき、両者はどのような関係にたっていたのだろうか。それは、子どもたちを見守る教師と子どもたち自身との関係と同じようなものだった。子どもたちは個々の植物や動物と親密に知り合い、それらに対して絶対の敬意を払うようになった。そして最初の観察の域を脱すると「生物に対する熱心な注意 (care) が育っていった⁴⁶⁾」。鳩が孵化した日は、子どもたちにとってすばらしい祝日であった。彼らは自分たちがこれらの小鳩の両親であると感じていたのである。また、夜中に咲いた美しい真紅の薔薇を囲んで子どもたちが地面に坐り、瞑想にふけっている姿もみうけられた⁴⁷⁾。モンテッソーリは動植物を育てる作業の過程で「一種の交感が子どもの魂とその世話のもとに成長する生命の間に生ずる⁴⁸⁾」と主張して、生物に対する子どもたちの感情を「愛情の一形式であり、宇宙との融合との一形式である⁴⁹⁾」と説明している。以上述べたように、彼女は他人とのふれあいばかりでなく自然とのふれあいが、道徳発達の出発点でもあり到達点でもあると考えていたのである。

おわりに

本稿は、モンテッソーリのフェミニズム思想が最初の「子どもの家」のカリキュラムにどのように生かされたかについて考察を試みたものである。

1章で、『モンテッソーリ・メソッド』初版に沿って「子どもの家」の教育内容について概観した。2章では、初版に紹介された「子どもの家」における時間割（冬期）に拠りながら、1章で述べた教育内容が「子どもの家」で実際にどのように扱われていたのか、またそれらの教育内容間の比重はどうだったのかについて考察した。子どもたちが適切なケアを受けておらず、家庭で学ぶべきことを学んでいないのだと考えたモンテッソーリは、家庭の雰囲気と子どもたちの家庭から失われてしまった

と考えられるカリキュラムを「社会化された家庭」としての「子どもの家」にとりいれた。そのため、初期の「子どもの家」でのプログラムにおいて、実際生活の練習と感覚教育の練習が大きな割合を占めていたことについて述べた。3章では、「子どもの家」が子どもがそこで安心して、心を落ち着けて心ゆくまで自分の生活ができ、自分の能力を存分に発揮できる場所であったことについて述べた。また、注目すべきことは、自己へのケア、他者へのケアから、動植物や自然環境へのケアへと同心円的に子どもがケアの対象を広げていくことができるようにカリキュラムが構成されていたことである。

いうまでもなく、小論はモンテッソーリのフェミニズム思想と教育思想を明らかにするためのひとつの試みにすぎない。ネル・ノディングズはケアリング教育の姿として六つの分析観点をを用いている⁵⁰が、その着眼点からモンテッソーリのフェミニズム思想を検討していくことは、今後の重要な課題である。また、「子どもをケアする場としてのホーム」というマーティンの着眼点から彼女のフェミニズム思想を検討していくことも、今後の課題である。さらに紙面の関係上、本稿では感覚訓練・読み書き算の練習とフェミニズム思想との関係について論じることができなかった。この点については稿を改めて論じることにはしたい。

(使用テキスト)

Montessori, M. *The Montessori Method, Scientific Pedagogy As Applied To Child Education In The Children's Houses*, tr. by Anne E. George, New York : Fredrick A. Stockes Company, 1912 (M.M と略記)

(引用・参考文献)

秋田喜代美「保育者のアイデンティティ」『保育者論の探求』、ミネルヴァ書房、2001年。

オムリ慶子『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究—言語教育を中心に—』風間書房、2007年。

中田尚美「子どもの家にみられるモンテッソーリのフェミニズム思想」『保育研究』第35号、平安女学院大学短期大学部保育研究会、2007年。

ネル・ノディングズ『ケアリング：倫理と道徳の教育—女性の観点から—』立山善康他訳、晃洋書房、1997年。

早田由美子『モンテッソーリ教育思想の形成過程—知的生命の援助をめぐる—』勁草書房、2003年。

早田由美子「モンテッソーリのフェミニズム思想と教育思想—世紀転換期における発言を中心に—」『教育学研究』第72巻2号、日本教育学会、2005年。

前之園幸一郎『マリア・モンテッソーリと現代—子ども・平和・教育—』、学苑社、2007年。

ミルトン・メイヤロフ『ケアの本質』田村真・向野宣之訳、ゆみる出版、2000年。

M. モンテッソーリ『モンテッソーリ・メソッド』安部真美子・白川蓉子訳、明治図書、1974年。

Martin, J. R. *The Schoolhome : Rethinking Schools for Changing Families*, Harvard University Press. 1922 生田久美子監訳、『スクールホーム』東京大学出版会、2007年。

註

¹ 前之園 2007

² 中田 2007

³ オムリ 2007

⁴ 早田 2003

- 5 早田 2005
- 6 Martin 1992
- 7 3C は、「家庭性」を特徴づける Care, Concern, Connection のそれぞれ頭文字をとったものである。マーティンは 3C を家庭やスクールホームに不可欠の要素であるとしている。
- 8 M. M p. 99
- 9 ibid., p. 95
- 10 ibid., p. 101
- 11 ibid., p. 69
- 12 ibid., p. 369
- 13 ibid., pp. 97—101
- 14 ibid., pp. 121—124
- 15 ibid., p. 137
- 16 ibid., pp. 138—146
- 17 ibid., pp. 155—161
- 18 ibid., p. 162
- 19 ibid., pp. 163—166
- 20 ibid., p. 167
- 21 ibid., pp. 185—214
- 22 ibid., pp. 177—178
- 23 ibid., pp. 224—245
- 24 ibid., pp. 271—296
- 25 ibid., pp. 296—308
- 26 ibid., pp. 326—337
- 27 ibid., p. 234
- 28 ibid., p. 335
- 29 ibid., pp. 119—120
- 30 ibid., p. 120
- 31 ibid.
- 32 オムリ 2007、202 頁。
- 33 M. M p. 267
- 34 Martin, pp. 18—19
- 35 M. M p. 68
- 36 ibid., p. 51
- 37 ibid., p. 348
- 38 ibid., p. 278
- 39 Martin, p. 14
- 40 M. M p. 87
- 41 ibid.
- 42 Martin, p. 15
- 43 M. M p. 347
- 44 Martin, p. 14
- 45 筆者は先の研究（中田 2007）で、子どもの家では男女を問わず日常生活の基本的能力を養成しようとしたこ

と、女性だけでなく、女性と男性の双方をケアする者へと育てようとしたことについて述べた。

⁴⁶ M. M p. 157

⁴⁷ *ibid.*, pp. 158–159

⁴⁸ *ibid.*, p. 159

⁴⁹ *ibid.*

⁵⁰ ノディングズは、自己へのケア、親しい他者へのケア、見知らぬ者へのケア、動物、植物、環境へのケア、事物に対するケア、アイデアに対するケアと子どもは同心円的にケアの対象を広げていくとしている。またそのようにカリキュラムが意識して構成される必要があるとしている。

Feminism and Educational Thoughts of Montessori ; Focusing on her practice at “Casa dei Bambini”

Hisami NAKATA

The aim of this paper is to consider how Montessori’s feminism thoughts influenced her educational practice at “Casa dei Bambini”.

Montessori developed “a new women” image while associating intelligence, work, and motherhood mutually. For supporting women, she realized “Casa dei Bambini” as a socialized home.

The success of “Casa dei Bambini” depended on Montessori’s managing to combine a scientific approach to education with family affection and the three Cs of care, concern, and connection that were a part of the school’s atmosphere and central to its curriculum.

本稿では、まず『モンテッソーリ・メソッド』初版に沿って最初の「子どもの家」の教育内容について明らかにし、それらが実際にどのように扱われていたのか、またそれらの内容間の比重はどうだったのかについて考察した。モンテッソーリは、家庭の雰囲気と子どもたちの家庭から失われてしまったと考えられるカリキュラムを「子どもの家」にとりいれたのであり、子どもたちがそこで安心して自分の生活ができ能力を発揮できるようにケアの関係を成立させたのである。また、注目すべきことは、自己へのケア、他者へのケアから、動植物や自然環境へのケアへと同心円的に子どもがケアの対象を広げていくことができるようにカリキュラムが構成されていたことである。